

教養英語と発音指導 —— 私のメモから ——

河野 通

(平成3年9月30日受理)

To Improve Students' Pronunciation — from my memos —

Tôru KÔNO

(Received September 30, 1991)

序

前回、即ち「東京家政大学紀要第31集」において、教養課程等における音読指導について書いたが、そのときは、主に文強勢とイントネーションについて、指導上留意すべき点を述べた。

そもそも、あることについて言うとき、そのことばかりが大切で、ほかはそれ程でもないように言うてしまうことがあるようだが、英語の発音指導に当って、あるいは、単音(音素)の指導に偏して、いわゆる「かぶせ音素」について意を用いないとか、あるいはその反対に、例えばイントネーションが正しければ単音は不完全でもいいというのは、勿論一面において正しいが、度を越えてはならないことであると思う。あるいは、いわゆる教養英語の指導上、発音指導そのものを軽視して、講読に、あるいは作文指導に重点を置き過ぎるのも好ましいことではないこと無論である。

われわれは日本語を母国語としている。指導の対象は日本人学生で、普通に中学校以来6年間の英語教育をうけて来ていて、いつも共通日本語(これを標準日本語と呼んでも差支ない)を話し、あるいは、話そうと思えばいつでも話せる人びとである。大韓民国や中華民国からの留学生が僅か含まれるが、私がおのりびとの母国語を知らないことは残念であり、私のマイナス点である。英語の音(単音・母音・子音)の指導に当っては、常に日本語と比較するように心掛けなければいけないと思う。私も日本語や日本語音声学の勉強不足を痛感している。なお、英語については、概ね標準とされる英米それぞれの音を対象とするが、どの音が標準英音で、どれが標準

教養部

米音かということになると、むずかしい理屈になると思う。その辺は専門家に委せて、以下、単音(当面は母音のみ)の指導技術に徹したい。

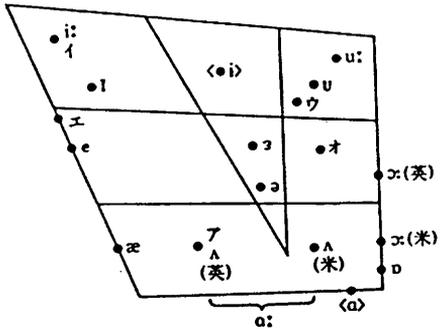
1.1 母音入門指導

もとより教養課程における発音指導は、できるだけ講読(あるいは作文)の授業の中でそれとなく(というのも大げさかも知れぬが)行われるべきである。特に単音、それもとりわけ母音の指導は、中学の(英語そのものの)入門期に徹底していなければ困る道理である。その意味では、母音再入門とするのがよかったかも知れない。入門があって再入門があって、その中程は文法と訳読の練習に明け暮れてよろしいのである。この点について「後記」をご覧願いたい。

1.2 日英の母音概略指導

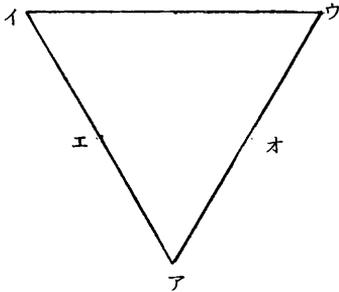
以上述べたところに徹するならば、英語の母音は幾つあるかなどは、いらざることになってしまうし、「基本母音(Cardinal Vowels)」(ダニエル・ジョウンズ氏考案)を示すことも憚られるわけであるが、英語の母音の数は多いのだぞ、アイウエオで済ませているわれら日本人にはその習得は難事であるぞと思い知ってもらいたいし、もう大学生になったのだから、多少ともまとまった指導をしてもいいかも知れない…と考えて、次の図を、今井邦彦氏(1989)から借りて示す。但し、教師の心構えとでもいうべきもので、特に〔ɜː〕,〔ɒ〕は示すべきでないかも知れない。但し〔ʊ〕は臨機に示していいと思う。重ねていうが、系統立てて英語の発音を教えることは、本旨ではない。

この図に対しても一向に理解も興味も示さない向きに



第1図

対しては、私は次のような日本語音のみの極く大ざっぱな図を示して、「アエイオウ」と言って聴かせている。つまり、原則としては舌の位置によって音は変るものだという初步的事実を思い知らせるわけである。だから口は大きくあけて、不自然でもまた不正確でも何でも、少くとも第1図の中の日本語音を出して聴かせるわけだが、学生は不思議に納得するものである。その納得の上に第2図を示せばわかりがいい。通常「日本語の母音三角形」と呼ばれるものである。発音教授の主眼点は口の形に置き、舌の位置は従となる。



第2図

片仮名表記についてはむしろ問題はあるまいが、発音記号を用いることには抵抗もあろう。今日の高校卒業生は、当然発音記号を知らないはずである。発音記号など知らなくても、英語が発音できる、あるいは、新しい単語に出会っても即座に読める（発音できる）だけの術を（それは、フォニクなどというものを含めて考えてもいい）備えているならまことに結構である。発音記号については、後に再び触れなければなるまいが、私は、こ

の段階で〔ɪ〕や〔ʊ〕を含む精密表記に学生の注意をひいておいていいと思う。但し、厳密に過ぎることは避けなければならない。やはり大切なことは、ネイティブあるいはニア・ネイティブあるいはノン・ネイティブにしても、の発音を耳から聴かせることである。

以上で、英語にはこんな母音もあるのだ、いや、あったのだが、中学以来、あまり注意をはらってこなかったので、今十分に発音できないから、この機会、つまり、教養課程2年の間にやり直さなければいけないのだという自覚を促すことである。

3.1 母音各論

以上で、母音再入門のきっかけが与えられたとして、以下とりあえず11個の単母音の指導上、必要と思われる注意事項をあげてみたい。今井邦彦・五十嵐新次郎・安藤賢一・竹蓋幸生各氏の理論に加えて、私の実践上の教訓から、今すぐにも役立つものと念願した。発音術あるいは発音指導技術と呼びたいゆえんである。また from my memos であるゆえんである。

3.2 〔æ〕の指導

以下は順不同というのが正しいと思うが、学生にとって苦手であるところの、この〔æ〕を最初にあげたい。

指導上幾つかの特色がある、即ち(1)極く普通の音であり、中学校で習得したはずでありながら、いつの間にか忘れられてしまう。(2)発音記号はおぼえている、しかもよく発音できない。(3)短母音といわれながら幾分長い。(4)日本語のある方言に着目すると学び易い。(5)英米差に幾分注目すべき語がある。次にそれぞれについて解説する。

(1) 入門期に習う語、即ち hand でも cap でも〔æ〕を含んでいる。しかも、ハンド、キャップというカタカナ言葉から推して〔æ〕を忘れる。Cat はキャットで〔æ〕の意識なく、全く日本式になり、僅かに〔t〕で英語式になる類である。面倒だからアで代用するのか、あるいはこの音が何かおかしい音と感ずることはないか、〔æ〕と言ってすぐ自分で驚いて、口をおさえてまわりを見まわす動作（故五十嵐新次郎氏）、「少しもはずかしい音ではありません、英語の標準音にある音ですよ」（故松本亨氏）が、私の記憶にある。勿論 bat — but や、some — Sam — sum などの練習は大切である。

(2) 〔æ〕という記号は、どういいうわけか、記憶に残

るという学生が多いようである。そこで、ついでに予という記号を見せて、この二個の記号を、時に応じて板書して、幾分の効果を期待している。但し、記号だけおぼえて実地ができないのは、関係代名詞という文法用語をおぼえて、「昨日買った本」が言えないというのに等しい。予については、項を改めて述べる。

(3) 長い短母音といえはおかしいが、これがうまく言えなくて、正に単母音で言ったとしても、通じないという程のことはない、つまり、示差的でないものの、英語らしさまで欲張ると、大いに気になる点である。故関口存男氏が「英語の〔æ〕はひどい。ヘアーと延ばしておいて、あ、いけない、短母音だったと息をのむ…」はすばらしい。

(4) 「名古屋にはソーキャ(ケャ)ーモがあるし…」とはじめると効果的である。「ヒャークレルシチャーミエンシ」と表記すると判然としないが、2個の〔æ〕を含むものようである(「日は暮れるし目は見えんし」)。但し、今出典が明らかでない。岸信介氏の発音(例: 「(その)際」〔sæ:〕)については、柴田武氏の分析に詳しい(1953)。岸氏とその令弟佐藤栄作氏の「(そんなことは政府としては)カンゲァーテネァー」は五十嵐新次郎氏の分析であった。勿論、仮名表記は私の便宜上のもので、〔ŋæ:〕であり〔næ:〕であろう。

(5) 英米差は、指導上では、小異を捨てて大同に就くべきことが原則である。〔æ〕について、例えばaskを〔æsk〕という米式で、〔ɑ:sk〕という英式ぐらいは、心得ていていいであろう。しかし実際には〔ɑ〕よりも上になっても結構通じよう。高中の教科書の脚注の一部のようにくわしいことは、あまり有益ではないと思われる。

3.3 〔æ〕の指導補遺

そもそも〔æ〕を言わせるのには、アの口をしてエと言うとか、エの口をしてアと言う式が一般のようである。私は昔からエアアといって、自分では十分言えたと思ってきた。例えば書取りをするときに、新しいparagraphを示すとき、ニュー・ペアラグラフというように言ってきたが、あるとき大西雅行氏は前述のような、つまり「アの口形をして…」式を主張し、秋山和儀氏は〔æ〕のフォルマントには〔ア〕のフォルマントも〔エ〕のフォルマントも表れるとして、エアに非ず、予なりとして私に忠告された。ここに安藤賢一氏の $\left[\frac{ア+エ}{2}\right]$ を加え

ておく(1984)。最近、島岡丘氏は「発音記号と仮名表記」(「英語教育」1991)で次のように述べている。「〔ア〕か〔エア〕か、/æ/の記号が示されていても、Japanの発音は多くの日本人は「ジャパン」のようになってしまいがちである。原音に近づけるために発音記号と仮名表記を併用して次のようにすると有力な発音獲得手段となる。Japan [dʒəpæən, ジュブ^アアン] この仮名表記は従来の『ジャパン』よりは原音にさらに近いように思われる。Map, bad, sadなどの発音記号は(C+A)と示している場合が多いが(Cは子音)、/æ/は二重母音化することが少なくなく(Catsford, 1986)〔^ア〕の仮名表記は捨てがたい。」次に、今井邦彦氏(1980)から引く。「〔æ〕の変種としては〔εə〕も英米両語にあり、この使用も〔ɑ〕,〔ʌ〕,〔e〕との区別をつけるためにすすめられてよからう。」

話は古くなるが、私のはじめてテープレコーダーというものをいじったのは、もう40数年も前のことで、最初のもはNECの製品であった。確か、再生も巻戻しも同スピードといった不便なものであったと思う。しかもシングル・トラックであった。しかしシングル・トラックのお蔭でアカサカの反対回しがアカサカと聞こえるなど、またカ=kaを瞬時に悟らせて、ローマ字入門に有益であった。スピード調節のできるものが出現したとき、æ⇒エアで何とかなると教えることができた。

〔æ〕を言うには「余程思い切って舌を前に出すつもりでないと成功しない」(今井邦彦氏, 1989。今後《今》とする)今井氏に従えば、イギリスにもアメリカにも〔æ〕を使わない方言があって、イギリスではこうした方言の矯正には羊の鳴き声をまねさせるという。私は先頃ロンドンへ行ったが、行く前に学生の〔æ〕を矯正することがあり、イギリスの羊は〔bæ:〕と鳴くそうだが、よく聴いて来ようと約束して(「毎日ウィークリー」のある号にもそんなことを書いた)ものの、結局は、羊の姿を遠くから眺めるだけで、約束は果せなかった。今井氏は「ヤーイ」(〔jæ:i〕)や「流石あ」(〔sæ:sugæ:〕)などブレイ・サウンドを利用するという。私は友人Oの「馬鹿あ」(〔bæ:kæ〕)を伝えながら、心中では、日本の空の護りに殉じたO中尉の靈に祈りを捧げている。〔æ〕の指導についても、われわれ日本人教師の間にもさまざまな指導法があると思う。例えば、ほほえむが如く云々というひともあるが、一言でずばりと好結果が得られるものはあるまいか。大学の

教養課程にはいつて来ても〔bak〕で押し通して、決して〔bæk〕を発音しない学生は、将来もこれで行くのであろうか。通じればいい（前述のように英米共に〔a〕は方言）というものの、語によっては、変な連想を呼ぶものもあるし、教養2年間のうちに矯正しておきたい音の最たるものである。しかし、高校3年生を相手にして〔æ〕の練習ばかり（ネーティブ・スピーカーが教える場合は、幾分割引くとして）はよくない。余程上手にやらないといけない。高校生にはやらなければならないことが山程ある。教養英語の出番ではあるまいか。教養課程ではなぜか発音指導がやりやすいのであるが、このことは前回（紀要31号）にも述べた。

4. 〔ʌ〕の指導

〔æ〕の次に〔ʌ〕を考えてみたのは、順不同というものの、われわれが「ア」に一括して終う母音をまとめようとするだけのことだが、実際に〔ʌ〕は「ア」によく似ている。第1図でも隣に並んでいる。Sunでもcomeでもgunでも、何のためらいもなく、サン、カム、ガンで行けると思う。「…だから教室での筆者は、安心して日本語のアを使え、ただし〔ʌ〕ではアよりも口を大きく開くこと、と指導している。」（今）私は、講読の時間には、このようなことさえ言わぬ方がいいと思っている。ただ、範読に際しては幾分でも本場の発音に近づけようと、つまり「(1)口の開きがアよりも狭く、(2)ややオの響きが入っている…」（五十嵐氏、今後（五）と略す）程度の心得はもっている。Busを「バス」よりも「重い、曇った感じ」（五）で、あごを引いて言っているのだが、いかがなものか。なお、私はsponge, stomach, front, company, onion, worry が出現したときには、少々誇張して「ア」の流儀で言って聴かせる。対応する通常の日本語では「オ」になっているからである。どのような音環境のときo〔ʌ〕かという説明は格別複雑ではないものの、その説明を聴かせるよりも実演と矯正である。ここは学生の読みを訂正すべきところか、すべきでないところか。強調し過ぎると、loveはいいにしてもLondonが日本語流「ランダン」になってかえって遠くなる。例の「セサミー・ストリート」でキャラクターA（アニメ）が〔frʌnt〕と言う。Bが〔frɒnt〕か〔-ɒ-〕位に言う。始めから終わりまでそれで行く。〔frʌnt〕も〔frɒnt〕も両方現れて、この教育番組では要統一などと誰も言わぬらしい。文部

省検定教科書と違うところか。〔frɒnt〕に近くやっていると、ある年の共通一次試験（当時）ではマイナス点をとったであろう。

ともかく、折に触れてmatch — muchとかsome — Sam — sumとかを登場させて鍛えておくことは、教養の講読においても大切な仕事である。あとは、あまり凝らないことであろう。なお〔ɔ〕については問題を残すかも知れないが、あとに譲る。

5.1 〔ɑ:〕の指導

これもアの仲間として聞こえる音であるから、fatherは「ファーザー」流で一応は差支ない。カタカナ表記としては、勿論のこと、問題はない。但し、英語の時間に英語を発音する段になると、もっと口を大きくあけて、と頻りに注意しなくてはならなくなる。私の自己流は、(1)もっと大きく、パクンとあけて、(2)指が縦に3本はいるぐらいにという2点である。今井氏は「『耳鼻科医にのどを見てもらった時の声を出せ』と指示しているが、これはなかなか効果がある。」（今）という。私は今、栄養学科1Aのクラスで、James Kirkup, *Hearn in My Heart*（桐原書店、1985）を使っているが、この本のタイトルに言及するとき（日本語の談話の中で）、Hearnとheartとを際立たせて言うように努力している。範読においては、勿論、十分それらしく発音し、随伴テープの声を聴かせるに当たっても、時折は注意を喚起するのだが、さて個人々々の音読練習となると、ハーン・イン・マイ・ハートという、それこそ、英語としては全く迫力のない、影の薄い発音となって、到底ネーティブにはわかってもらえないようなものになる。甚しい場合はこのすっきりしているはずのミニマル・ペアーに数分を割かなければならなくなるが、やさしいテキストとはいえ、1年間に亘ってこればかりやっていると、かえって有害かと思って、慎んでいる。教えなければならないことが多過ぎるからである。

5.2 〔ɑ:〕雑感

前章で我流の〔ɑ:〕指導法と、特に現況について述べたが、再三述べる通り、音声学教授というような場合はともかく、今の場合は一応これでいけると思う。以下は滅多に教室には持ち込まない事項だから、「雑感」としてみよう。

(1) Pass, after, bathなどを〔æ〕で習って来た

学生もいるはずだが、一向に聞こえてこない。そういえば〔ɑ:〕も聞こえてこない。英米差については、小異を捨てる立場から、〔æ〕でも〔ɑ:〕でもいいし、差程気にしないのが原則だから、また、日本語流の「パス」でいけたらそれでもいい。Danceは教室では〔da:ns〕なのか〔dæns〕なのか、「ダンス」ではいけないか。Dunce〔dʌns〕と混線することはどの程度あるのか。〔da:ns〕とわざわざやって「歯が浮く」(五)のでは困る。日本語流といえるところあたりが適当ではないか(江本進氏)。アメリカ人かイギリス人、特にイギリスの上流社会の人びとをキザといって笑うとき、これを材料にすることがあるようだが、そこまではおつき合いできない。

さて、当大学は先頃オーストラリアのNewcastleから3人のお嬢さんを迎えた(留学生)。3人は「njú:kɑ:sl】,せめて「カースル」ぐらいを期待していて、〔kæsl〕はどうやらお呼びでない発音のようだった。日本ではアメリカ音が、多くの場合、優勢であることの一例であるかも知れない。本場から来たお嬢さんたちの気分を損ねない程度に「ニュー・カースル」でありたかった。但し、研究社英和大辞典は〔njukæst〕を現地(但しイングランド)の音としては伝えている。

(2) 私は、少年の日の、学校の音楽の時間のアーイーオーウが、何かはずかしくて困った。なぜあんなに口を開くのか、なぜアエイオウなのか、アイウエオではいけないのか。しかしともかく〔ɑ:〕の練習には助けになる。東は東、西は西、日本人はそんなに口を開かないぞと思っていたら、長唄にも謡曲にも〔ɑ:〕は出てくると聞いて困った。両方とも音楽の時間の話だと思って、平素は看過している。音楽といえば〔æ〕の項でいうべきことであつたが、〔æ〕は、ポピュラーソングは別として、正式の歌曲では避けられるという。そのかわりに〔a〕や〔ɑ〕がつかわれるという(以上今井氏・五十嵐氏)。時には、今問題にしている〔ɑ:〕も現れるであろう。何しろ音楽のことだから。私は小学校以来、音楽(唱歌)は駄目だから、歌で発音指導はしないことにしているが、歌えたらどんなにいいだろうかと思う。

(3) 〔ɑ:r〕(〔ɑʌ〕)の扱い 前述の使用教科書のタイトルを言うとき〔ha:rt〕のように言う必要があるか。もしHearnを〔hɜ:n〕と言えばheartは〔ha:t〕, Hearnを〔hæ:n〕と言えばheartは〔ha:rt〕と英米の半仄を合わせるか、私はきれいな

っぱり〔ɑ:r〕をやめていいと思い、そのようにしている。大体が英米混淆である。

(4) 〔ɑ〕の扱い 〔ɑ:〕には習熟しなければならない。少しキザに聞こえても、口を開くのがしんどくても、勉強しなければならない。しかし、〔ɑ〕は〔ɑ:〕が発音できれば、あとは何でもない。しかも、アメリカ英語を目標とするときに言えればいい。Shop〔ʃɑp〕, honest〔ʌnɪst〕, John〔dʒɒn〕の類であつて、英音ならそれぞれ〔ʃɒp〕,〔ʌnɪst〕,〔dʒɒn〕であろう。それならば、私の教室では、英音でいこうということになるか。テープからネーティブの〔ʃɑp〕が聞こえて来て、学生が〔ʃɒp〕とか〔ʃɒp〕と言う風景は普通であつていい。テキストは英あり米ありであること勿論である。

6.1 〔ə〕の指導

〔ə〕は極く英語らしい音であろう。しかし、この音は、前回(紀要第31集)において、「強いところはうんと強く、弱いところはうんと弱く」発音すべきこと、そのように指導すべきことを述べたが、〔ə〕がそのことのように自然に会得できたら何よりである。曖昧性をおのずから悟らせることが大事である。〔ə〕を抜き出して発音して聴かせることは、あまり意味がないと思う。〔ə〕=アに徹しても困ること無論である。

6.2 〔ə〕雑感

先ず発音記号を教え込むのは本意でないこと、これは原則であるものの、〔ə〕も結構学生の頭に残る記号のように思える。「〔ə〕の字を見ると虫唾(むしず)が走るという音標文字恐怖症患者さえいるくらいです。」(五)

五十嵐氏が、「〔ə〕はビールのようなもので、例えば人体の中では生きていますが、それを取り出すと死んでしまいます」と、大要このように言われたことを思い出す。おもしろい譬えだと思ふ。そのあとで、氏は「〔ə〕を何度か発音して、「暑い時分の犬が発する音です。」とつけ加えたものだ。何とも楽しい話である。

ある友人がある予備校で教えているとき、生徒の一人が「先生はmovementをムーヴメントとおっしゃいますが、正しくはムーヴメントではありませんか」という。友人は「私はムーヴメントと言います」と言ってムーヴメントで押し通したという話。当時、ラジオの講座に黒

田嶋氏が出演していて発音を教えていた。その中に [mú:vmənt] の類があって、この熱心な生徒のこの質問となったのだろうと想像されて愉快であった。確かにこれはウに近く聞こえる音である。一応mentはムントに近しと教えることにも意味はあるが、件の予備校生の如く固いのもどうか。それにしても、友人も見事である。ただしmóve-をうんと強く-mentをうんと弱く、メントに非ず、またムントに非ざるあたりを(記号など使わずに)示せると尚よかった。(以上祐本寿男氏)

私の妹が女学校で英語を習っていた頃、「オー ビュータフル ビュータフル」と朗読練習していたのを思い出す。私自身が中学生の時分、ある友人は、先生の発音には耳をかさず、todayをタデーとやっていた。先生は発音記号を教えてくれなかったのを、熱心な友人は独習し、しかも周囲にタデーの類をひろめていた。私が感染しなかったのは、姉が当時英文科の学生だったせいらしい。

Gentlemanもgentlemenも、普通には[-mən]であることは、前述の黒田教授から学んだ。単数も複数も同じに発音されるなどは当時の私には不思議に思えたものである。

Beforeやbelowが出て来ると、時々[ə]を使って範読してみるが、あの予備校生のようなひとは出て来ない。

漫画などにs'priseとあると嬉しい。今は昔、同僚に二世の女性がいた。「これMさんの傘? いい傘持っているのねえ。I'm surprised.」あの時分は日本全体が貧乏であったに違いない。あんな傘であんなに驚いたのだから。それからMさんはふだん持ち物などに気を使わないひとと思われていたから。とにかく[ə]は脱落さえる。とはいうものの、surpriseを単語としてはっきり発音してきかせようというときは[səpráiz]にもなり得るであろうから、本来はこの使い分けも必要といえようか。

[ə]を知って[ə]を使う、勿論それは結構であるけれども、実は知らない方がいい、あるいは、少なくとも知らなくていいのではないか、教える側からすれば、依らしむべしに近いかも知れない。Movementを—ムントというならpossibleを—サブルとか—スブルとかいうことになるかも知れないが、タデイやビュータフルと同様の問題であろう。要するにここは[ɪ]に近い[ə]であろう。何よりアクセント教育、それも位

置より質である(紀要No31)。以上は、思い出話を含めた雑感であるが、何事も学習の過程では、あるときは変に杓子定規で、段々とそれが崩れて丁度よくなるものだという事を痛感する。

7.1 [ɪ]の指導

発音記号を知らない、あるいは、それに十分の関心のない学生に[ɪ]を教えることは、新しい記号が加って面倒である。記号の数は少ない方がいい。第一、[i]ならば、学生は発音記号と感ぜないであろう。しかし[ɪ]を知らないと、そのために、いつまでたっても日本語的、あるいは、一部通じない発音を背負い込んだまま世の中に出ることにならないか。

[ɪ]をはっきりと立てないで[i]で済ませる(簡略表記)ことで、われわれは、「広軌にすべきを狭軌にしたほどの誤りを犯した」(大西雅雄氏)とまでいわれると、考えてしまう。鉄道に警えることには問題もあろうけれども、ズバリ直言の効果はある。それやこれやで、一応は[ɪ]をつかうが、何よりも実演が大切であることは論を俟たない。

自らの方言との関係をいうなら、東京方言かそれに近い方言を話している学習者にとって、この音の修得はむずかしいとされる。私自身の方言の中には[ɪ]は存在しないように思う。必ずしも常に示差的ではないが、I eat itと言ったつもりがI eat eatと聞こえるのは困る。但し、これはフランス訛りの英語についての話である。(今)

7.2 [ɪ]の指導補遺

私は随伴テープを聴かせた段階で、いくつかの単語を拾い出して練習し、もし、shipでもあればsheepと較べて練習し、身にしみて貰う。そのとき、大抵は「イとエの間の音」といって済ませる。今井氏は「[ɪ]の音質を教えるのに、初学者に対して『イとエの間の音だ』というのは、それほど目的を得ていなくもない。しかしこの教え方は往々にして[ɪ]を日本語のエにしてしまう結果をもたらす。こうなるとbid[bɪd]とbed[bed]との区別があやしくなる…」と言う。私はその辺の混乱が起るくらいなら大したものだがくらいに済ませている。

「小指の先を軽く噛みながら(このとき舌の先がひっ込む)『イ』を短く発音するとこの音になる。」(安藤賢一氏, 1984, 以後《安》)は、すぐれた指導法である。

東北方言等に似た音があることをいえば、東北出身者は自信をもって〔ɪ〕が言えるはずで、What time is eat?にも似た東京流の欠点を指摘、また矯正できよう。

〔æ〕に予があるように〔ɪ〕に¹を考えたのは萩原恭平氏という(出来成訓氏1991)。この点について後述する。

7.3 〔ɪ〕雑感

確かに〔æ〕の指導には十分の力を注がなければならぬが、〔ɪ〕にはそれ程神経質になることもあるまいというのは尤もだと思う。しかしdifficultを「ディーフィカルト」式に言うのはどうもいただけない感じである。竹村健一氏が「デリシャスではありませんよ、デリシャスですよ」というとき、日本語は長音にしないとアクセントが現れないのかと考えさせられる。とにかく〔dɪlɪʃəs〕を発音することは、竹村氏にとってむずかしいらしい。余談ながら、patternをパターンと書く限り、英語の時間にも(sentence) pattérnと言う学生は絶えまい。私は昔ベルリンという表記(映画の字幕であった)に感心したことがある。但しこれは当時一部に行われた²ベルリンに対するだけのことで、竹村氏かと思うドイツ語の話になるかも知れない。

私が学生の頃、栃木県出身の級友がいて、教室の一番うしろにすわっていた。私は一番前にいた(座席指定)。ある先生の時間、先生がその級友に対して何か言う。級友は「ええ、ええ」と答える。先生はお説教だったか、とにかくまた何か言う。級友は「ええ、ええ」で済ます。ふと気がつくと、級友の「ええ」はどうも私の「ええ」とは少し違う。後年の五十嵐氏の「いいってばさ」の〔ɪ:]に近かったのだろうか。NHK朝のドラマ「おしん」は〔oʃɪn〕に近かったのだろうか。「カカヤノアトトリニ ウマレタモノノ サダメダカモ シンネーナ」が耳に残るが、アドドリだったかウマレダだったか、専門家にきかなければなるまい。それにしても「シンネーナ」のあたりは〔ɪ〕〔ɪ:]に近くなかったか。

「〔ɪ〕は、角のとれた、まるみのあるイです。イほど鋭くないのです。イとエの間といってもよいでしょう。イのときのように上下の歯を合わせることなく、すこしすき間を作ります。それから、下顎を前へ出して(鮫鱈《あんこう》ほどでなくても結構ですから)上歯と下歯が揃うようにして、イと発音すると〔ɪ〕がでます。い

わゆる東北弁のイは〔ɪ〕によく似ています。東北の人が、鉛筆をインピツといったときのイは〔ɪ〕によく似ています。下顎を心持ち前へ出して、上歯と下歯を揃えること、上歯と下歯の間を少し開けることをお忘れなく、〔ɪ〕の練習をしていただきます」(五)この引用の中で「東北の人がインピツ云々」とあるのは、勿論、イとエの中間の音をつかって言ったのだから、それをインピツときいたのは、東京方言(あるいは共通語)を話す五十嵐氏である。上野駅のラウドスピーカーからウイノが流れているというのは、東京方言を話す人であろう。エを期待する人の耳へ〔ɪ〕がきこえてくれば、その先のイと聞いて終う(安井稔氏)。そこで今日も「ふるさとのなまりなつかし」と感懐にふける人も、あの人混みの中にはいることであろう。

さきに(6.2)、ビュータフルに言及したが、ビュータフルのように言って、しかも、チの母音を無声化する発音とくらべると、言い方によってはビュータフルが優ると思う。Hospitalを発音して〔-pɪ-〕と言うのは、私の学生には極く一般的である。しかし矯正するのはどんなものか。範読に際して、ホスペタルというぐらいに極端に言って、さらに、関西出身者のウツクシー

〔utsʊkʊʃi:]と東京方言中心のウツクシー〔utsʊkʊʃi:](アクセント表示を略)とをくらべて、東京等の出身者の注意を促したりするが、どうかするとウツクシー対キレイナという語彙論になって脱線が過ぎたと反省する。ディーフィカルト(前述)と言ってしかもその2番目の母音を無声化するくらいならデフカルト、正しくは〔dɪfɪkɪt〕位でいい。あまり説明的になると、これも脱線、余興化する。

私の思い出の中に、故渡辺半二郎氏のピアリオデセテ〔piəriədʃɪtɪ〕があるが、もはや私のtwentyは常に〔twénti(:)〕ぐらいである。岡寿吉氏の〔kántri〕などを聞くと、昔なつかしい。なつかしくても、指導上は言及できない。

ɪは予のようには効力をもたないのは当然であるが、英文科の学生を指導するなどの際に、どうしても〔ɪ〕がわからないとか、無視する学生に対して注意をひくためにつかうならいいと思うが、ɪは、明治の始めにヤ行子音(エ段)を表わすためにつかわれ(ほんの短期間)た、あるいは考えられたと聞いたことがあるから、もし混乱しそうなら避けなければならぬ。それにしても、萩原恭平氏の創意工夫、そのアイディアにはいつもながら

敬服する。

なおテケツ（チケツに非ず）やステッカーは大いに利用したい。

8.1 [i:] の指導

[i:] については格別の指導は要しない。むしろ7.1以降の [ɪ] をわからせるために、その対比として示し、それによって [ɪ] が会得できればいいとしたいが、以下メモ的に多少述べておく。

8.2 [i:] の指導補遺

前章で述べた通り、われわれは [i:] にこだわる必要はない。五十嵐氏が「…日本語のヒーと、英語の he [hi:] と比べてみますと、ヒーの方は、ヒの発音に少し軋（きし）んだ音が聞こえます。ということは、日本語のイーは、舌の位置がかなり高く硬口蓋と交渉を持つところまで上がっているともみられます。日本語のヒーの軋んだ音を音標文字では [çi:] と書きます。これに比べると英語の he には軋んだ音はなく、[h] + [i:] です。これは、英米人に he を発音してもらい、自分のヒーの発音を聞き比べればすぐ納得のいくことです。上歯と下歯の開きなども注意してよい点で、日本語のイーは上歯下歯をしっかり噛み合わせて発音しますが、[i:] の方は、いちおうの間隙を持っているようです。要するに、英語の [i:] は日本語のイーほど鋭くないことを注意していただければよいと思います。」(五) と言うとき、[çi:] と [hi:] を一部日本語のイ（イー）と英語の [i:] との差の問題とする点は、注目していいと思う。安藤氏は、「(i:) は日本語の「イー」とよく似ているが、唇はもっと左右に開き、舌も緊張する。」と言う。私はハ行イ段の子音を表すのにはいつも [ç] をつかってきた。五十嵐氏も別の個所で、「日本語のハヘホの子音は同じ [h] です。ヒのときはイの影響で舌の位置が非常に高く、硬口蓋に接近して軋み始めます。この軋みを [ç] で表わし、日本語のヒを [çi] と書きます。」(五) という。このあたり、日本語に [ç] が現れるのはイの影響というのは正しいであろうが、これが英語になると、例えば he [hi:] である。私は、h ですよ、のどから息を出して、という教え方をしている。ある友人は、ドイツ語の ich を常にイッシというが、江戸っ子に共通の現象家と思われる。東京方言を話す人の中でも、下町っ子とか江戸っ子とかいわれる人に「シト

がシかれて大変」や「シバチにシを入れとくれ」が聞かれる。これを英語にもち込むことは、示差的でないにしても、賢明ではない。朗読に当って、江戸っ子になることを戒めたい。シーローは hero とあまりに遠い。東北方言その他を話す人の history の第1音節は、手本になる。Hue においては [hju:] と共に [çju:] も認められるようであるが、これは [h] の方に脱線した。常に hit-heat のような練習を行い、[i] を十分認識し、練習させ、東京方言話者に注意を促しておきたいものである。

9.1 [u] の指導

ここでも精密表記を一応つかうものの、7.1以降の問題と同様である。[u] を示すか否かは、人を見て法を説く類でよろしからう。

Wood や would, あるいは wolf のような語を、ウッド、ウルフと発音することは、日本人学生にとって一般である。これについてあまり [u] を強調して教え込むことは避けて、英語らしさのためには、ということで自覚させなければなるまい。

しかし、助け舟として、「唇をまるめ、口笛を吹くときの口の形で『ウ』と発音する。後舌面は [u:] の場合ほど高くない。隣接音との関係で、[u] が『ウ』よりも『オ』に近く聞こえることがある。」(安) 但し、ここで [u] とあるのは今 [u] と示しているものである。

「[u] の正しい音価を会得するためには、pull, full などの語をまず「練習台」として用いることがよい。p や f の唇音であることと1の暗さが助けになっているためと思われる」(今) の中の「暗い1」に関する部分をありがたく借用したい。

なお舌を硬くしないようにまた唇をまるめ過ぎないようにという注意は大切である。

9.2 [u] の指導補遺・雑感

私がかつてアメリカに留学したとき(1959-60)、当時の「フルブライト委員会」のきもいりで、出発前に米婦人による英語の特訓を受けたが、put という語の発音が最も下手なのが私ということになり、大いに弱ったことがある。つまり、日本語のプットに近く言ったのでは円唇不十分と思い、一生懸命に円唇を心掛けた結果が [u:] の場合のようになってまるめ過ぎていたのであろう。同席した数人の中には、大分プットに近いひとも

いたと思うが、片や〔u:〕の場合に近い行き過ぎであれば、片やプットに近くても、先生（米婦人）としては、そのひとに軍配をあげざるを得なかったであろう。このことについては、〔u:〕の項で考えてみたい。しかし、「〔u〕は通常『軽い円唇性を持つ』として記述されており、これはこれとして正しいのだが、唇の丸めというものにほとんど縁のない日本語を母国語とする学習者にとっては、かなり意識的に強く唇の丸めを加える必要がある」（今）を読むと、あの30何年も前の横浜のあの特訓クラスの私の困惑も大方にわかっていただけるかも知れないと思っている。

ある友人（故人、宗教学者であった）が、50歳ぐらいではじめて英米に留学した。帰って来て、私に、「連中のwouldの発音はおかしいね、ウッドじゃないね」と言った。この友人は、発音など一向気にしないで、英語を話し、また読み書いたが、留学してからは、大分気を遣うようになった。とにかく、would〔wud〕を自ら会得したということ、それが中年に達してネイティブに囲れて始めて会得したということ、それは大いに興味のある出来事ではあるまいか。

「渡辺先生はbookをボックというそうですね。またwhoをホーというそうですね」といわれた故渡辺半次郎氏の発音はまことに見事であった。渡辺先生の発音に部屋の空気がビリビリとふるえた、と言ったのは大村喜吉氏である。

10.1 〔u:〕

〔u:〕については、格別の指導は不要と思う。

Shoes, groupはシューズ、グループに円唇を加えればいい。後者においては、勿論のことながら、指導の焦点は〔r〕、さらに〔gr〕,〔tr〕という子音群に集る。

10.2 〔u:〕雑感

既に指導は不要と述べたが、それは概ね日本語流でいいということである。さきに、少年の日の唱歌の時間のアイオーウーについて述べた（5.2）が、どういうものか、その時のウは〔w〕でなく〔u〕でなく、〔u:〕であったかも知れない。随分と口をとがらしたおぼえがある。五十嵐氏も「音階練習のときのウーがほしい〔u:〕だと思っていただけでよい」という。今井氏は「口笛が出るくらい」口先を強めるようにと教えるという。さらに「これは今までのところ決して行きすぎの効

果は生み出してはいない」という。私がput〔put〕を言うべく唇を丸め過ぎたとき〔u〕になっていたであろう（9.2）。それらはネイティブにとってそのように違う音なのであろう。

前述の渡辺（半）先生の例のように、一般の日本人学生にとって奇異であるぐらい違わないといけないのであろう。「whoと風（ふう）との違いにご注意ください—もっともこれは母音だけの違いではありませんが」（五）。

〔ju:〕対〔u:〕は、通常、英対米であるようだから、気をつけるに越したことはないと思うが、例の小異を捨てて大同に就く立場からすれば、考えなくてもいいのではないか。しかしblueを〔blju:〕は避けた方がいいと思う。Screwも〔skru:〕がいいのは当然であるが、日本語のスクリューが邪魔をする。たのあたりでも、むしろ子音群の発音こそが大切である。

母国語あるいはその方言を大いに活用したいのであるが「関西（大阪を中心とした）のウーは〔u:〕に非常によく似ています」という観察については、私自身は十分心得ていない。「関西のウーを、口笛を吹くときのような口の形で発音すれば〔u:〕とほとんど変わらない音になります。〔u:〕は東京のウーに比べてもっと深く—ということは舌の位置が違うことですが一唇のまろみも狭いのです。」（五）という観察の通りであれば、〔u:〕は関西弁話者にとって習得しやすい音であろう。これから勉強したいと思っている。只今のところ、私のメモにはない。

〔u:〕に舌の緊張が伴うことは、教える者として、範読に際して十分示すべきであるけれども、上に述べた事柄を実行させるなかで、体得させられるのである。それにしても舌について教えることは、唇について教えることよりずっとむずかしい。

11.1 〔ɒ〕

われわれの年代のものは〔ɔ〕で通して来た。〔i〕と〔ɪ〕ほどに気をつかうこともあるまいが、幾分の差があるようだ。Holidayの英音は〔hɒlɪədi〕のように写される。米音では〔hələder〕。ミッションスクールの1年生になった親戚の娘がハラデーとやって、私を驚かせた、公立中学校へ行った私の発音はホリデーに近かったから。字面はholidayで、ローマ字のhoはホである。小異を捨てて大同にであるから、それでよさそうであるが、日本人のモシモシ（電話のときの）を、英語

の国の人、丁度「ムシムシ」(〔mʊ-〕または〔mú-〕)のように聞くという話(五)は、考えさせられるところである。それがわれわれの、何となく外に出ない、こもったような、不明瞭な発音のもとでもあったら、避けなければならぬ。

11.2 [ɒ] の指導

Hot, gone などはホットやゴンと言われることが多いであろうが、私の自己流は口に指を2本入れよ(3本は〔ɑ〕)という式であるが、いかがなものか。「指2本に丸口」という式である。

音楽の時間には、大分近くなるようである。五十嵐氏の指導法に曰く、「…〔ɑ:〕から始めて、〔ɑ:〕を短く、唇を十分まるめて発音すれば、〔ɒ〕が出ます。」即ち〔ɒ〕が出る次第で、今井氏も大体同様のようである。コーヒーのホットを英語に持ち込まない注意がある。

11.3 [ɒ] 雑感

英音〔ɒ〕は米音〔ɑ〕であるから、Godは米音〔ɡɑd〕であるが、ある友人は米人が、Let's pray to God.と言ったところ、「時間がない、もう帰る」とやって、その米人を仰天させたという。Let's play cards.と聞いたというのだから不思議である(故中桐宣也氏)。もし米式を真似るならhot dogはハットドッグに近いであろうか。ハットよりもさらに大口に、正に指3本から始める必要がある。Onward Christian soldiers…という歌は屢々聞かすが、オンワードぐらいに覚えていた私の耳に、あの大战のあとで日本にやって来た米婦人のアンワードに近い指導は驚きであった。洋服屋さんは依然オンワードであろうか。さて、onを単独のかたちで出されると日本人は一向にわからないという例は多くないか。特に米音〔ɑ(:)n〕はアンの如くアーンの如く、onは常にオンと思っているとまるでわからない。友人M氏(アメリカ人)のonを、別の友人Y氏(ドイツ語専攻)がわからない。「カミサマワウエニルカラ〔ɑ:n〕ナンデスヨ。」日本語の上手なかつ親切なM氏もonをオンとは言えない。Y氏は英語も上手なのだがonをアーンとはまさかと思っている。そこはドイツ語の教師である。もしテキストにonを強形で発音すべき個所が現れたら心掛けたい。英語は指2本、米語は指3本というわけである。

12.1 [ɔ:] とその指導など

Lawやtalkなど頻出する語の発音にあまり無頓着は困ると思うときは、五十嵐氏に従ってlaw対low(a law studentとa low student)の対比に目を向けさせている。舌の最高点はオよりウしろで低いが、それより唇のまるみを〔ɔ〕あるいは〔ɒ〕以上に加えることで出せる。アメリカ英語では上述のlawやtalkでは〔aw, au, ou〕〔ɑ:〕に近くなる。今井氏もそのような指導をされるようだし、NHKラジオの東後勝明氏のtalkはタークのように聞こえてよき模範だと思うが、氏はロンドンで勉強中と聞いた(あるいは今は帰国されたかも知れない)。それにしてもアメリカ流と思うがどうか。あるいはオーが私の頭にあるからであろうか。

12.2 [ɔ:] 雑感

雑誌(ニューズウィークだったか)に「そろそろ日本のベースボール・シーズンがやって来る…」という記事があり、「またbowlやstorikeが聞かれる…」というようなことを述べていたが、日本の球審がボール!と叫ぶと、正に〔boul〕と聞こえないか。「残念ながらボール」といった顔付きや身振りを伴って、あれはあれで粋(いき)に見えるから不思議である。Storikeについては、アメリカ人の耳に僅かでも母音が〔t〕と〔r〕の間に聞こえるというのはおもしろい。あるいは日本語を少々知っているひとのコメントかも知れない。私はここでstr-という子音連続にまで脱線したり、いつかラジオで聞いたメジャー・リーグのアンパイア達の〔strɪk〕のヴァリエーションの数々を真似てみせ(聞かせ)たりしている。しかし結局は子音連続と重母音の重要性を説いて終りになる。とまれ日本野球が野球であって(ベース)ボールでないなら、発音上または語彙上、日本式でよろしいということになる。

13.1 [ɜ:]

〔ɜ:]は英音に現れるから、現在使用中のテキストのうち、安藤賢一氏編*Twenty Tales*(成美堂1991)の随伴テープから頻りに聞こえてくるが、既述の〔ə〕は極く近い。唇を平らにしさえすれば似てくる。しかも、高校時代に米音に親んで来た学生なら〔ɑ:]は得意のはず(後述する)であるから、それでいい。教師の心算

えにとどめていい。英米混淆の所以である。

13.2 [ɜ:] の指導と雑感

[ɜ:] の指導について「教室では、調音点についてあまりやかましく言わず、唇を平らにすることを強調して教えている。唇の形さえ決まれば、調音点の方は模範の音を聞くことにより比較的容易に会得されるようである。なお、平唇そのものは誰にも出来るのだが、この音を発音しようとする唇が普通の状態に戻ってしまう学習者がある。このような人々には『奥歯を接触させること』という指示が効果がある」という今井氏の指導法に全く賛成である。先ず唇の開き具合第一は、私の一貫する教え方であること、極く平唇にしてよければ、例の「チーズ」を応用してもいいし、両手の指を使わせてもいい。私は故寺西武夫氏の bird を思い出す。氏の口はもともと横にぐっと開く感じであった。それがいよいよ「ベード」の如く聞こえ、ある友人も「(寺西先生は)『ベード』と言うね」と言った。私もしばらく真似をしていたが、いつか米語流に [bɑ:d] と r-colored vowel を使うようになり、ある時、同僚にアメリカ生れの二世野崎夫人(正確には3歳の時ハワイに渡り同地で教育を受け(ハワイ大学文学部卒)、のち日本に帰り英語教師となる)を得てその指導を受けるようになってから(実はこのエッセーのレジメは、同夫人の校閲を経たものである)、全く反転母音をつかうに至った。前述の通り、学生(特に女子学生は一何の根拠もないが一巧みであるようだ)は黙っていても、[æ:] をやってくれる。ただ world などがやや下手だが、これは w が下手なのかも知れない。いよいよ曖昧に言えばよく、それが楽のようである。

後 記

実はこのあと、私が平素、指導上重点を置くところの重母音について書く予定であったが、紙幅も尽きようとしているので、次回に譲りたい。単母音の中にも言い残したものがあるし、また、子音こそインテリジビリティを決するものだともいわれること(例えば竹蓋幸生氏(1990))も承知である。今回はとにかく講読の時間に是非必要と思われる単母音の指導に関する私のメモ帳から、[æ], [ʌ], [ɑ:], [ə], [ɪ] の類に関するものを拾って書きつけてみた。今井邦彦・五十嵐新次郎・安藤賢一各氏の著書には特にお世話になった。

各氏とも一流の学者でありながら、有能な実際家である。本稿は、もとより一般教養英語等において、例えば講読の時間に指導するためのメモであるから、詳細な音声学書とは程遠い、いわば発音術の書であることは前述の通りである。

発音記号は教えない方がいいのか、青木栄一氏(翻訳者)や村田聖明氏などが発音記号を教えよと主張する。島岡丘氏は仮名表記への試みを示す(1991)。私は最少限の発音記号を教養課程で与えていいと思う。本稿に出したもの(一部 [ɒ] や [ɜ] の類を除く)ぐらいは教え込んでいいと思う。昔ハロルド・E・パーマー氏が、「アルファベットでさえ大変なのに」という批判にこたえて「坂道をのぼれない人に手を貸すのは当然」という意味のことをいったという話を思い出す(大西雅雄氏)。

いわゆるヒアリングの指導は勿論大切である。しかしこのペーパーで私がいうように、自らの発音を正しくして、相手にわかってもらう努力と共に、聴き取る力をも養わなければならないことは無論である。この点、「ヒアリングの力をつけるには、やはり自分で発音できるようにするのがかえって近道である。」(島岡丘氏1991)は尤もである。ただ、聴いてわからない原因の最大のもの、語彙力の不足ではあるまいか、別の問題かも知れないけれども。

テストについて一言すると、入試問題によく出題されるのは、綴字と発音の問題である。例えば、country と county とを並べてみせる類である。この種の発音問題は中学・高校・大学と一貫して出題される。中学と大学で、同じ語について試されたりすることもあるが、それはそれでいい。綴り字と発音はいつまでもついて回る。ただ実際の発音ができないのに点数だけは取れる式の問題は、本当は困る。いわゆる英検には口頭(面接)試験があるからまだいい。教養英語のクラスを小さくするほかない。専門課程に進んでからでも [æ] を大事にしてほしい。就職試験に英語は出るか。出てもむずかしい英語は出ないであろう。将来どんな具合にどんな英語とかわるのか。

発音はいい方がいい。英語は通じればいい。しかし、模糊とした発音は聴いてもらえない。30年前のアメリカ留学のとき思ったことだが、中間のペルー人のグランカノンやテレビジョンが通じて、われわれのグラントンやテレビジョンはなぜ通じないのか。「日本人がもっともっと大勢アメリカへ来るようになれば通じるでし

よう。」と私は言ったものだ。今はそうなっていることだろう。しかし [grændkjænjən] や [téləvɪʒən] などとやってとにかく聴いてもらわないことにははじまらない。私は小松達也氏の英語が好きである。この同時通訳者の発音の基礎十分なところ、その上にすべてが乗っているところ、正に模範である。静かな英語といった感じ、それと模糊とは大違いである。教養2年間では、基礎を授けなければならない。

今年の夏、駿河台大学でポール・マッカーシー氏の日本語習得の思い出話を聴いて感銘した。裏返して、われらが英語習得の模範にできる話である。つまり、文法・翻訳式教授法で入門しても、最後に発音指導を受けて完成できるのだという話である。さいわい日本の入門期（中学校）の英語教育は日進月歩である。そうして大学へ進むひとはふえている。マッカーシー氏の最後の仕上げに似たことをしてあげられるのは、教養課程2年間で

はないか。発音術の指導は無駄ではあるまい。

主要参考文献

- 五十嵐新次郎 1981 英米発音新講 (English - its vocal expression) 南雲堂
 今井邦彦 1989 新しい発想による英語発音指導 大修館書店
 安藤賢一 1984 演習英語音声学 (A practical course in English phonetics) 成美堂
 島岡 丘 1991 発音記号と仮名表記 雑誌「英語教育」vol. xxxix, no. 12 大修館書店
 竹蓋幸生 1982 日本人英語の科学 研究社出版
 柴田 武 1958 日本語の方言 岩波書店
 河野 通 1991 教養英語と朗読指導 東京家政大学研究紀要第31集

Summary

In my last paper, *Oral reading practice in general culture English (Bulletin No. 31)*, I placed much emphasis on stress and intonation or poetical features as essential elements in developing students' oral reading ability. I took it for granted that all of my students had come to my *kyōyō* or general culture English classes with some basic knowledge and skills of English pronunciation. I found, however, that some of the students needed more practice in the pronunciation of individual English sound as well as poetical features.

I began with the [æ] sound, as the sound is very well-known to the Japanese students together with its queer phonetic symbol, only they are not able to pronounce the sound correctly.

In many of the English classes in Japanese schools, emphasis has mostly been placed on reading ability, rather than speaking ability. There are arguments for and against this. The grammar-translation method is by no means a bad or harmful method. It is a good method, I think, though not ideal. I propose two conditions that should be attached to the adoption of the translation method: (1) pronunciation training in the earlier stage of secondary education, and (2) brushing it up in the college *kyōyō* or general culture level classes.

I have been taking notes or memos whenever I come across important matters concerning English pronunciation. I have written this paper from my small notebook. Besides my memos, I also have quoted from the three books I always have on my side. They are: —

Professor Shinjirō Igarashi's *English — its vocal expression*

Professor Kunihiko Imai's *Atarashii hassō ni yoru Eigo hatsuon shidō*

Professor Ken-ichi Andō's *A practical course in English phonetics*